
HUNTER × HUNTER ~ とある少女の冒険記 ~

葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HUNTER×HUNTERとある少女の冒険記

【Nコード】

N7751V

【作者名】

葉月

【あらすじ】

幻影旅団に一人の少女が加わり、さらなる被害が巻き起こる。崩壊の序曲がいよいよ奏でられる。

第1話 おめでとう×挑戦×ハンター試験（前書き）

HUNTER×HUNTER再アニメ化に伴い、物語を書いていこうと思います。

この物語は、『リリカルなのは』灰色の軌跡』と並行して書くつもりですが、更新頻度は『リリカルなのは』灰色の軌跡』の方が多いです（たぶん）。

第1話 おめでとう×挑戦×ハンター試験

天空闘技場。それは、強者が集いし大都会の頂き。数多の挑戦者たちが挑み、自分自身の力を試す場所。

天空競技場190階。そこ1つのリングで観客が歓声を上げ、熱狂していた。彼らが熱狂している理由。それは、対戦カードであった。

「クリティカル&ダウン！ 3ポイント！！ アリス。合計10ポイント、アリス選手TKO勝ち」

『決まったー！！ 破竹の勢いで上がってきたアリス選手、200階到達ですー！！』

リング上には、床に沈んでいるプロレスラー風の男と彼を見下ろしている小柄な少女がいた。彼女は、気絶している男を一瞥すると、さっさとリング上から退場する。

選手控室に向かう廊下の途中で、アリスはピエロの様な格好をした人物を見つけ、足を止める。

「やあ？ 200階おめでとう？」

「ヒソ力ですか……。何の用ですか？」

「つれないな？ 祝福してるのに、その態度はないんじゃないかい？？」

「そうですか。ありがとうございます。では」

アリスは、ヒソカの脇を抜けて歩きだす。

しかし進路を塞ぐ様に、ヒソカが立ちふさがった。その行為に、アリスは眉を寄せ、どういふつもりかと左右の色が違う瞳で睨む。

「通してください」

アリスの威嚇に、ヒソカは気にした様子がない笑みを浮かべている。

「キミ？ 今年のハンター試験を受けるんだろ？？」

「……ええ。私の保護者が受けるって、言っていましたし。どのような試験が課せられるのか、個人的に興味があります。それがどうしたのですか？」

ヒソカから『ハンター試験』という言葉が出てきた事に、アリスは眉をさらに寄せる。ヒソカは相変わらず笑みを浮かべたままである。

「そんな顔をするなよ？ 可愛い顔が台無しになるじゃないか？」

「うるさいです。ハンター試験に貴方は関係ないはずですよ？」

ヒソカの言葉にアリスは嫌悪感を露わにし、彼から数歩後ろに距離を取る。

「ボクも今年のハンター試験を受けるつもりなんだ？ そんなに警戒しないでおくれよ？」

アリスはさらに5歩、ヒソカとの距離を開ける。

「さすが変態ですね。ここじゃ飽き足らず、ハンター試験でも人を殺すのですか？」

「失礼だなあ？　ボクは分別をつけて殺しているよ??」

「そうですか……。もう何も言いません。用件が終わったなら、通してください」

ヒソカは、アリスの言うとおりに道を開ける。アリスは、ヒソカの脇を通り抜けて200階の登録をするために、エレベーターへ歩いて行った。

そんなアリスの背中に向けて、ヒソカはほくそ笑みながら。声を掛けた。

「そうそう？　もうすぐハンター試験が始まる？　君もそろそろ会場に出発したほうがいいよ??」

「アドバイス、ありがとうございます。あと、1人で行けますので付いてこないで下さい」

「それは残念？」

アリスの去り際の言葉に、ヒソカは落胆の声を上げた。彼女は、ヒソカに背を向けていてわからなかったが、彼の表情は言葉と裏腹に怪しい笑みを浮かべていた。

ヒソカのねつとりとした視線を振り切ったアリスは、200階で登録の受付を行っていた。200階に足を踏み入れた時、それまでの階とは雰囲気が全然違った事に気付いた。アリスは、この雰囲気の中、興奮が収まらなかった。彼女は、これまでの相手が弱く、張り合いがない事に不満に思っていた。

「さっそく参戦の申し込みをなさいますか？」

アリスが登録受付を済ませた時、受付の女性が試合を行うかどうか訊ねてきた。アリスは、ハンター試験の準備が済み次第、出発するつもりだったので、参戦の意味がないことを受付の女性に伝えた。

「それでは、こちらが部屋の鍵になります」

「ありがとうございます」

アリスはお礼を言い、自分に宛がわれた部屋へと向かった。

「あ！　そういえば、200階到達の報告をしなければなりませんね。いつもどこにいますでしょうか？　私の保護者の方々は……」

部屋へ至る廊下の途中で大切な用事を思い出し、サイズが合っていないコートから携帯電話を取り出す。いくつかある電話帳の名前の中から、ある人物の名前を画面に表示し、通話ボタンを押す。

「あっ！　マチですか？　アリスです。はい、期日以内に200階

に上がりましたのでその報告です。これからハンター試験を受けてくるので、試合は終わってからです。はい、団長にもよろしく伝えてください」

アリスがちょうど連絡が終わった時、自分の部屋へと到着した。鍵を開け、当分の間お世話になる部屋へと入室する。

「なかなか広いですね。さすが、200階クラスです」

アリスは、ショルダーバックとぶかぶかのコートをベッドの上に置き、試合でかいた汗を流すためにバスルームへ向かう。

「それにしてもこの体……。なんとかならないのでしょうか？」

アリスは、服と下着を備え付けの洗濯機に放り込み、傍に設置されている鏡に映った自分の華奢な体つきを見て頂垂れた。そこにはポニーテールだった銀髪を降ろし、左右の瞳が金色と銀色というオッドアイ、将来は美人になる顔つき、二次性徴を迎えてないのか起伏の乏しい白磁のような肌の体を持つ、背の低い少女が立っていた。

「全然成長しないのは、なんででしょうか？ やっぱり牛乳を飲まないのが原因ですか！！」

鏡の前で、自分の体について憤りをしばらく感じていたアリスだったが、寒くなってきたので、さっさとシャワーを浴びる。

少しぬるめのお湯を浴びていると、冷えた体がだんだんと温まる。肌は、体温の上昇で薄っすらと紅く染まっていた。

「ふう。さっぱりしました」

アリスは、バスルームから上がり予備の下着を着ると、緑と赤のチェックのスカート、白のブラウスに着替えた。

「さて、ハンター試験の準備を済ませて、試験に臨みますか。1発合格でご褒美は頂きます」

シヨルダーバックから財布を取り出し、意気揚々とハンター試験の準備のために街にアリスは繰り出した。

第1話 おめでとう×挑戦×ハンター試験（後書き）

以上で、第1話をお送りします。

伏線？ 何それおいしいの？ 状態のお話となっていますが、話を進めるにつれて、原作とは違う道筋に持って行けたらな～と思います。

さっそく出てきたヒソカですが、あまり変態要素が感じられない仕上がりになっていますが、これで大丈夫か？

第2話 到着×始まり×1次試験

「試験会場は……定食屋？」

「そつだよ。お嬢ちゃん。常に意表を突く何かが起こるのが、ハンター試験だからね」

「そつなんですか……」

ザバン市の定食屋。そこに天空闘技場と同じ服装である緑と赤のチェックのスカートに白いブラウス、その上に黒いぶかぶかのコート、ショルダーバックのアリスとターバンを巻いた男性のナビゲーターがいた。定食屋が試験会場と聞いたアリスは、呆氣にとられた。

「入るよ」

「あ、すみません」

ナビゲーターと一緒にアリスは、試験会場の定食屋に入る。

「へい、いらつしゃい」

「いらつしゃいませー」

2人が入ると、店主と思わしき男性と従業員の女性だけしかいなかった。

「ステーキ定食。弱火でじっくり」

「あいよ」

「奥へどうぞ」

ナビゲーターが注文すると、店主は眉をぴくりと反応し、にやりと笑みを浮かべる。女性の店員の案内で、奥の個室に案内される。個室には、すでに1人前のステーキが焼かれていた。

「本試験がんばって。期待しているよ」

「ありがとうございます」

ナビゲーターとアリスは、お互いに別れのあいさつを済ませ、扉を閉めた。

「着くまでに完食しませんと」

弱火だった火力を強火に切り替え、彼女にはボリウムのある定食を食べ始めた。

定食を丁度食べ終わった時、エレベーターだった個室が目的地に到着した。扉が開かれると、暗い地下道が広がっている。降りた先の受付で、受験番号406番のプレートを渡される。

「レオリオ、クラピカ。女の子も受けるんだね」

「おいおい、ゴンより小さいガキが受けるのかよ」

「レオリオ、失礼だぞ」

受付近くの一団がアリスの姿に気付き、それぞれ声を上げた。釣り竿を持った緑の服を着た少年は、興味深々にアリスを観察し、眼鏡を掛けた青いスーツを着た青年は、アリスの容姿を見て挑発的な言葉を言い、金髪の少年はそんな青年を注意していた。そんな様子を四角い鼻を持つ男性が苦笑いでやり取りを見ている。

青年の言葉にむつときたアリスは、プレートをコートの袖口に入れて、その一団の下に歩み寄る。

「ガキで悪かったですね。おじさん」

「なっ、おじさんだと?」

アリスは開口一番、青年に仕返しとばかり、第一印象そのままに彼の事を「おじさん」と呼ぶ。それに対し、青年は少し気にしていたのか、青筋を立てアリスに殴りかかろうとしていた。

「レオリオ、やめろ。もとはと言えばこっちが悪い」

「そうだよレオリオ」

レオリオと呼ばれた青年は、少年2人に止められて殴りかけられないでいた。

「こちらが失礼した。私はクラピカ。レオリオに代わり、先ほどの発言は取り消させてもらいたい」

「俺、ゴン。さっきはごめんね。レオリオも悪気はなかったんだ」

レオリオを止めながら、クラピカとゴンという少年達は、アリスに謝罪した。

「そんなに怒ってないので、別にいいです」

アリスは2人の謝罪を受け入れ、頭を下げた。

「紹介が遅れたな。俺はトンパ。今年で37回目になる。まあ、ベテランってやつだ。よろしく。何かわからなかったら、なんでも聞いてくれ」

「アリスです。よろしくです」

レオリオとアリスのちょっとした小競り合いが収まったのを見計らって、四角い鼻を持つ男性が握手と一緒に自己紹介をした。アリスは、簡単に自己紹介をするだけにとどまった。

アリスは地下道を走っていた。ハンター試験の1次試験である。試験官はサトツという、紳士的な風貌の男性で口ひげがトレードマークの人物である。その試験内容は、「2次試験会場までついてくること」というものであった。

試験が始まる時に知り合ったゴン達は後方で走っており、アリスは先頭集団にいた。

「調子はどうだい？ アリス？」

「まだまだ余裕があります。ヒソカこそどうなんですか？」

「ボクも大丈夫だよ？ このぐらいへっちゃらさ？ でもペース配分は考えて走りなよ？？ まだまだこれからなんだから？」

「アドバイスありがとうございます。でも心配いりません。鍛練は怠ってませんので」

「そうかい？ こんな所で脱落なんてしないでくれよ？？」

アリスを心配してか、ヒソカが声を掛けてきた。彼女は、言葉の通りまだまだ余裕があったので、心配する必要なんてないと答え、ヒソカから離れるためにわざとペースを落とす。

意図的に距離を取ったからか、ねつとりとした感触がアリスの体を包み込んだ。その感覚に悪寒が背筋に走ったので、さらにペースを落として出来るだけ離れる。

「ふう、ここまで下がると、さすがにヒソカのねつとりとした感触は感じないですね……？。あとは、この距離を保って2次試験会場まで行くだけです」

アリスは、ヒソカのねつとりと体に纏わり付く感触を逃れた結果、先頭集団の最後尾に位置する場所を走る事にした。

それから数時間、目立った会話もなく、淡々と試験官のサトツの後を追っていた受験生に変化が訪れていた。5時間は超える時間を走り、体力的にも精神的にも疲れ、足を止める受験者が始まったのである。

「く、そがぁ……」

アリスの隣を走っていた受験生が、悔しそうな呻き声を上げて脱落した。その受験者は、数分前から足元がおぼつかなくなり、いつ脱落してもおかしくない状態であった。

隣にいたアリスは、ふらふらの状態でよく保ったと感心した。

「しかし、脱落者が邪魔ですね……」

体力と気力が尽きているからか、膝をついたまま動かない受験生に、アリスは苛立ちを募らせる。何度も邪魔な受験生を掃除したい誘惑に駆られるが、ヒソカと同類になりそうなので、必死に抑え込んでいる。アリスは、保護者達の教育により、殺しに対しての抵抗はない。教育の成果か、一度殺しのスイッチが入ると満足するまで止められない体質になってしまった。

「駄目だ……」

苛立ちが募っていたアリスは、目の前の受験生が脱落したのに気付くのが遅れた。左右に避ける時間はなく、乗り越えるしか選択肢がなかった。乗り越えるために歩幅を無理やり合わせる。

「ああ、もう！！」

我慢の限界に達したアリスは、乗り越えるときにその不満をぶつける様に声を荒げた。その拍子か、足元を『ぐしゃ』っという音が響いた。

「あ、ついやってしまいました」

アリスが振り返ると地面に体が押しつぶされ、血と臓物をまき散

らした遺体が転がっていた。苛立ちを発散した時、踏み込む足に必要以上の力が入ったようで、土台となった受験生は耐えられずに叩きつけられたようである。アリスは少しだが、殺しのスイッチが入るのを感じた。だが、まだ抑えることのできる状態であるため、これ以上スイッチが入らないように必死に抑える。

その様子を見ていた周りの受験生は、自分があんな姿にならないようにという思いに加え、にじみ出る殺気にあてられて、アリスから離れて走る様になった。そのおかげか彼女はその後、苛立ちを新たに溜めることなく地下道を抜け、地上に出ることができた。

第2話 到着×始まり×1次試験（後書き）

以上で、第2話をお届けします。

ヒソカがやたら出てきますが、あまり気にしないでください。なぜこうなった

第3話

混乱×波乱×ヌメーレ湿原

「ヌメーレ湿原。通称、詐欺師の埒。第2次試験会場へは、ここを通って行かねばなりません。この生き物は、ありとあらゆる方法で獲物を欺き、捕食しようします。詐欺師の埒と呼ばれる由縁です。気をつけて付いてきてください。騙されると死にますよ?」

地下道を抜けた先には、湿原が広がっていた。ほとんどの受験生は、地下道のマラソンに体力と気力をほとんど消費したのか、出口付近でへばっている。アリスは、コートを着ているにも関わらず、大して汗をかいていない。

「可笑しなことを言うぜ。騙されるのがわかってて、引つ掛かるわけねえだろうが」

レオリオがサトツの話聞いて、突っ込みを入れる。

「嘘だ!! そいつは偽物だ! 試験官じゃない! 俺が本物の試験官だ」

出口の裏側から、額に傷を付け、わき腹を押さえた男性が手足の長い猿を持って現れた。男性の言葉に、受験生の間に動揺が走る。

「偽物だと? どっちが本物の試験官なんだ?」

本物がどちらかわからない受験生の視線が、サトツと男性の間を行き交う。

「証拠はあるのかよ？ おっさん」

レオリオが疑いの眼差しをもって、サトツが偽物と主張する男に問いかける。それに対して、男は持っていた手足が長い猿を受験生の前に放り投げる。

「こいつは、このヌメーレ湿原に棲息する人面猿。人に化けて言葉巧みに人間を騙し、罠に嵌める。そいつは人面猿の仲間だ。受験生を皆殺しにして喰うつもりだぞ！」

男が放り投げた人面猿の顔は、試験官であるサトツそっくりの顔であった。

男の言葉に受験生の大部分がサトツに疑いを掛け、殺気を飛ばす。疑われているサトツは、無表情でその視線を受け止めていた。

「茶番ですね」

アリスは、偽物と主張する男性が起こす騒ぎに興味なさげに眺めていた。その間にも、受験生達はどちらが本物かどうかを見極めようとしていた。

「ライセンスはそいつに盗まれた。不意打ちされて何もかもだ」

クラピカがライセンスの有無で、本物がどちらか判断するべきという提案をするが、男性は盗まれたと発言した時に、アリスは動いた。

男性がライセンスを盗まれたという発言をした時、アリスは右袖を男性に向かって振るう。3本のナイフが彼に飛んでいく。

「なっ！！」

男性の顔面にトランプとナイフが突き刺さり、手足を痙攣させて後ろに倒れた。その光景に、傍にいたレオリオはもちろんの事、受験生一同は戸惑いの声を上げた。

「あ、あんたら……、なにしてやがる」

レオリオの戸惑いの声に、受験生の視線が2人に集まる。トランプを投げたヒソカとナイフを投げたアリスにである。

「こうする方が、早いでしょう?」

「騙し方が下手くそです。その奇術師みたいにうまい騙し方を身につけて出直してください」

死体となった男に容赦のない言葉を浴びせるアリスと冷笑を浮かべながら呟いたヒソカは、試験官であるサトツを見る。サトツの両手には3枚のトランプが握られていた。

「これで決定? そっちが本物だね?」

ヒソカはトランプの束を弄びながら、うすら笑いを浮かべる。

その隙に逃げようとしたのか、人面猿が飛び上がった時、頭にナイフが刺さった。アリスが華麗な投擲で仕留めたのである。

ヒソカは、そんな出来事を気にした様子もなく、言葉が続ける。

「僕らが目指すハンターとあろう者が、これくらいの攻撃を避けられないはずがないもの?」

「褒め言葉と受け取っておきましょう。しかし、次からはいかなる

攻撃も試験官への反逆行為とし、即失格とします。よろしいですね？」

「はいはい？」

サトツは、ヒソカのランプを指ではじくとそう忠告した。彼の忠告にヒソカは澄ました顔で返事をし、目を瞑っているアリスの隣に移動する。

「それよりアリス……人の獲物を獲らないでくれるかい？」

「試験官の方をあげたのですから、いいじゃないですか……」

アリスとヒソカの間には禍々しいオーラが満ちる。そのオーラは、プレッシャーとして周りの受験生に怯えとして影響を与える。しかし、ふとその雰囲気は霧散した。

「……まあいいよ？」

ヒソカは相変わらずの笑みを浮かべたまま、アリスの傍を離れ、301番の所へ去って行った。その場所に満ちていた空気が霧散したことで、周辺の受験生は安堵した。

「それでは、出発いたしました。2次試験会場へ」

サトツを先頭にヌメーレ湿原を舞台に再びマラソンが始まる。湿原のぬかるみとこの湿原特有の霧が、受験生の前に立ちはだかる。

アリスの目の前で、ヒソカが歓喜の声を上げながら次々と受験生を狩る。

この狩りの切っ掛けは、後方集団が濃い霧により先頭集団とはぐれた事による混乱であった。この湿原独特の生物が受験生に襲いかかったことで、1次試験どころではなくなり、どうにか逃げようと足掻いては生き物の餌となるという繰り返しが続いていた。さらに、冒頭のヒソカによる『試験官ごっこ』が始まり、その判定結果は不合格者〃死という審査方式であった。

ヒソカは、瞬く間に20人ほどの受験生を殺害した。その様子を見て戦意を喪失した受験生は、ヒソカに背中を見せ逃走を図ったが、肝心の殺人者は笑い声を上げて逃走する受験生を殺害した。そして彼は、生き残りがいないか周囲を見回した。

「全員不合格？　あとは……キミ達4人だけだね？」

生き残っている受験生は、53番、レオリオ、クラピカ、アリスである。4人は、お互いカバーできる位置に移動して、この惨劇を引き起こした当人の一挙手一投足を見逃さないように警戒していた。

53番とクラピカ、レオリオは巻き込まれない位置にいたため助かり、アリスはヒソカの攻撃を必死になって防いで生き延びたのだ。その時の殺気は尋常でなく、アリスは保護者達との訓練という名の殺し合いと同じように、気を引き締めていなければ死んでいたと思うとぞっとした。

「てめえ……」

「キミから……逝くかい??」

アリスが背中に冷や汗をかいているなか、レオリオがヒソカを睨み、呻き声のような声で威嚇する。

ヒソカは、レオリオの威嚇に対して、殺気を混じらせた視線で挑発する。

一発触発のプレッシャーにアリスは、隙があればいつでも動ける様に態勢を低くする。

「俺が合図をしたら、バラバラに逃げろ」

「何？」

53番が、ヒソカから目を離さずにレオリオとクラピカ、アリスに提案した。それにレオリオが疑問の声を上げる。

「あいつは強い。どんな人殺しでも、人を殺す時に一瞬のためらいがあるものだが、やつにはそれがない」

クラピカはその言葉に納得の意を示す。アリスも心の中で同意する。彼の事はここにいるメンバーの中で、よく知っているのだから。しかしレオリオは納得いかないのか抗議するが、3人の無言の圧力に屈し、逃げる事に了解の意を示した。

逃げるチャンスを探る4人。話し合いの中でも、じりじりと近づいていたヒソカ。

「今だ！！」

そんなヒソカが足を1歩踏み出した時にそれをチャンスと感じたのか53番の合図で、53番とクラピカ、レオリオは3方向に逃げた。アリスは逃げようとせず、態勢を低くしたままその場に残った。

「うん？ いい判断だ？ それよりアリスは逃げないのかい？？」

ヒソカは、バラバラに逃げるといふ選択肢を取った3人の行動に感心し、アリスの行動に疑問の声を上げる。

「ええ。わたしは、3人が逃げるまでの時間を稼ぎます」

アリスは、両手に3本づつナイフを持ち、キツとヒソカを睨みつける。

「いいよ……その表情、その意思？ ゾクゾクする？」

ヒソカは、そんなアリスに興奮しているのか、身体を震わせ恍惚の表情を浮かべた。アリスは、ヒソカの表情と滲み出るオーラを目の当たりにし、背筋の悪寒とともに全身に冷や汗が湧く。

「まだ熟れるのを待つ時期なんだけど……食べちゃおうかな？」

「禍々しいオーラをこっちに向けないでください。あと変態発言はやめてください」

「つれないな？ せっかく静めたのに、キミのせいでまた高ぶってきたじゃないか？」

興奮を抑えられなくなったのか、オーラがヒソカの体から溢れ出す。そのオーラは禍々しく粘りのあるもので、アリスは思わず数歩後ろに下がる。しかし、ヒソカにとってそれは隙に過ぎず、アリスは変態の接近を許した。

アリスは、バックステップで距離を開こうとするが、ヒソカとの

身長差を埋めることはできず、彼の間合いから逃れることはできない。彼女の着地を狙うかのようにオーラを纏ったトランプが迫ってきた。アリスは、対抗するためオーラを込めたナイフではじく。

ヒソカは続いて、着地の勢いを利用した左足の蹴りを放ち、アリスが稼いだ距離を帳消しにする。

アリスは、手に持っているナイフを地面に落とすと、胸の前で腕をクロスさせて防御態勢をとり、ヒソカの蹴りを受け止め、後ろに飛ばされた。その時に防御する両腕にできるだけオーラを集め、腕と足が接触する瞬間に後ろにさがる事で、できるだけダメージが無い様にする。

ヒソカは、飛ばされたアリスを追撃することなく、その場に留まった。

「なかなかやるね？ 流は及第点だし、戦闘中の凝も中々だ？」

ヒソカのオーラがいつもと変わらない量に変化した事に、アリスは疑問を持ちながらもいつでも動ける態勢をとる。

「でも、油断はいけない？」

「っ！？」

ヒソカの左手の人差し指に気付いたアリスは、慌てて人差し指を見る。人差し指からアリスの右頬にヒソカオーラが貼り付いていた。

「バンジーガム……」

「終わったとおもって安心したかい？」

「くっ！！」

アリスは油断したわけではなかったが、この失態が悔しかった。凝を解いた事はなかった。ヒソカの方が、技量が上で埋めようのない差であることに挫けそうになった。

アリスの呻き声が合図になったのか、ヒソカのバンジーガムが発動する。アリスは、ヒソカの左手に引き寄せられる。

ヒソカは左手で拳を握り、アリスを打ち抜いた。

右頬を殴られたアリスは、一か八か全てのオーラを頬に集めて防御しており、大した傷を負うことはなかったが、衝撃により、意識を手放した。

「あ、気がついた？」

「えっと……ここはどこですか？」

アリスが気がつくと目の前にゴンとクラピカがいた。

「ここは2次試験会場だ。私達は1次試験に合格したのだよ」

「そうですか……」

アリスは、1次試験に合格できた事に安堵した。お互い自己紹介を行い、少し雑談をする。

「しかし、きみも無茶をする」

「そうだよ。レオリオとクラピカが戻ってなかったら、死んでたかもしれないんだよ!!」

アリスが起きた事で安心したのか、2人のお説教と説明が始まった。アリスが殴られて気絶してすぐに、レオリオが戻ってきてヒソカと戦闘。手出しが出来ず、トランプで殺される所でゴンの釣り竿による攻撃がヒソカに命中。ヒソカの意識がゴンに向いた隙に、再びレオリオが攻撃するが、殴られてレオリオが気絶。ゴンは、ヒソカに顔をじつと見られたただだったそうである。

「――で、気絶した2人をヒソカが運んだんだよ」

最後にどうやって自分が合格できたかの説明を受けた時、ゴンが信じられない事を言った。

「ヒソカに運ばれたんですか……?」

「ああ。私達が運ぶと言ったんだが……」

クラピカ達は、アリスはこちらで運ぶと言ったようだが、相手にされなかったようである。それを聞いたアリスは、慌てて肩に掛けられていたコートを持って茂みに入る。

「アリス? どうしたの?」

「ゴンさんは、来ないでください!!」

アリスがこれから確認する場にゴンがいるのは恥ずかしいので、大声で威嚇した。クラピカはわかっているのか、そんなゴンを誘導

していた。

周りを見渡して気配がない事を確認すると、ヒソカにももされていないか体をくまなく調べた。

「……なにもされてない。よかったー」

体に異常が見当たらなかったことに、アリスは感激のあまり泣いてしまう。

「アリスー！！ 試験が始まるよー」

広場からゴンが呼ぶ声が聞こえ、アリスは涙を拭き、ちゃんと服を着て試験会場に歩いて行った。

第3話

混乱×波乱×ヌメーレ湿原（後書き）

以上で第3話をお送りします。

いきなりのヒソカVSアリスの戦いでしたが、どうでしょうか？
いっても、アリスは防御しただけでしたし、バンジーガムでノックアウトしていますが。というか、いきなり念能力を出しても問題ないですよ？

第4話 合格！？×不合格！？×料理！？

「2次試験の課題は『料理』よ！」

『料理？』

プレハブの扉から出てきたのは、男女だった。アリスは、ゴン達と少し離れた場所で試験官の説明を聞いていた。説明によると、前半に男性の課題をクリアした者が、後半の女性の課題を受けれる審査方式であった。

「前半の料理は、『ブタの丸焼き』。おれの大好物」

太った男性が出した課題はブタの丸焼き。近くで棲息するブタを使った料理という事で、安堵する受験生達。アリスも自分にも簡単にできそうな課題という事で安堵する。

「2次試験開始！！」

女性の合図のもと、森に散らばる受験生達。アリスもブタを探して森に入った。しばらく入った場所に問題のブタはいた。鼻が巨大な身体が特徴ではあったが。

「えっと……、確かこのブタがグレイトスタンプでしたっけ？」

グレイトスタンプは、アリスを見ると問答無用で襲いかかった。

アリスは冷静に、ナイフをコートの両袖から1本ずつ滑り落とすと、グレイトスタンプの機動力を削ぐために前足に放った。

「はっ」

ナイフは、狙い通りにグレイトスタンプの両前足に刺さり、横に倒れる。

なんとか起き上がろうとするグレイトスタンプの前に歩み寄ったアリスは、ブタの額にオーラで強化したパンチを額に当て仕留めた。

「よし、狩り完了です。あとは焼くだけ……」

周りから枯れ木を集め、課題であるブタの丸焼きを作り始めた。無事に焼けたグレイトスタンプを大男の元へ運び、彼の審査を待った。

「あーおなかいっぱい」

『……………』

アリス達受験生は、目の前の光景が信じられなかった。体長3mほどのグレイトスタンプの骨が70頭分積み上げられていたのだから。

「課題『ブタの丸焼き』終了！。70名試験通過ー」

女性の試験終了のお知らせにより、前半の試験通過者70名が決まった。試験通過に多くの受験生は安堵する。

「私はブラみたいに甘くないわよ」。2次試験後半の課題は『スシ』よ」

『スシ？』

女性の課題の料理がイメージできないのか、受験生のほとんどが戸惑った表情を浮かべていた。

「ヒントをあげるわ。この中をみなさい」

女性は倉庫を指した。受験生達は倉庫の中に続々と中に入り、そこにある道具を確認した。まな板に数種類の包丁、調味料、炊かれたご飯が即席の調理場に準備されていた。

「最大のヒント！ スシはスシでも“ニギリズシ”しか認めないわ。試験スタート」

女性のヒントと調理場にある道具で、スシはどういう料理かを考える受験生達。アリスも例外ではなかった。

「スシですか……」

アリスは、包丁を弄びながらイメージを掴もうとするが、全く予想出ずに困惑する。

「そっぴや、他の人は知っている人はいるのですかね？」

アリスは、自分の周りを見渡し、他の受験生の様子を観察する。

「さかなあ！？　ここは森の中だぜ！？」

「声がでかい！！　魚だったら、川や池にいるだろうが！？」

大きな声で、クラピカとレオリオの言い争いが聞こえた。2人の発言によると、酢を使ったご飯に新鮮な魚肉を乗せた料理らしい。

『魚かー！！』

2人の発言により魚が必要だとわかった受験生は、一斉に外に繰り出し、食材を確保しに駆け出して行った。

「へえー、魚が必要なんですか……。それより、声が大きいです、クラピカさんにレオリオさん……」

川に向かう途中で、2人に突っ込みを入れるアリス。おかげで、必要な食材が判明したので声に出さないが……。

川で魚を調達したアリスは、食材をどう調理したら課題である“ニギリズシ”になるか考えていた。

「まあ、いつまでも考えていてもしかたないですよね……」

深く考えても埒が明かないと判断したアリスはとりあえず、駄目もとで作り始めた。まず、まな板の上で跳ねている魚の頭を切り落として動きを止める。続いて、腹を裂いて内臓を取り出す作業を行った。

「で、ここからどうしましょうか……」

頭を落とし内臓を取り出された魚の前に、頭を捻っていたアリス。彼女の所にヒソカが皿を持ってやってきた。

「アリスは出来たかい?」

「いいえ。直感で作ろうとしているところです」

「そうかい?　ボクは、これで受けてみるよ?」

「なにをつくったのですか?」

「ヒミツ?」

ヒソカはそういうと、試験官の所へ並んでいった。

合格者がいるかどうか試験官へと視線を向ける。女性試験官の前には、行列が出来ていた。しかし、どれもニギリズシではないのか、食することはなくやり直しを求めている。

「はやく調理しないと、生で食べれなくなりますね……」

アリスは、とりあえず内臓を取り除いた魚に握ったご飯とちよつとひと工夫を加えた料理を完成させ、審査を受けてみることにした。

「気色悪いわあああつ!!」

列に並ぼうとしたとき、女性試験官の叫び声が響いた。体をずらして前を見ると、女性試験官が料理の載った皿を背後に放り投げる所だった。審査を受けていたのは、銀髪でアリスと同年ぐらいの少年であった。どんな料理を作ったのか気になったが、少年の審査を見ていたヒソカが列を離れ、外に出ていく姿が目に入った。

「？」

ヒソカのその行動に疑問を覚えた。落胆した雰囲気から、銀髪の少年と同じ料理でも作ったのかと適当に思い至った。

それよりも、問題の料理を作った少年にアリスは興味を持った。彼女は記憶から、ゴンと一緒にいた少年であると思い出した。

「あとでどういった料理だったか聞きに行きましょうか……」

アリスは自分の料理の審査が終わったら、400番台の仲良し3人組と銀髪の少年の様子を見に行こうと考えた。

「うーん……残念。はい、つぎ」

アリスの料理は、やはり課題のスシではなかったようで、やり直しの判定を受けた。アリスは不合格判定を受けた料理を持って、ゴン達の所へやってきた。

「あ、アリス！」

「あれ？ おれたちよりも小さいのが参加してるんだ」

銀髪の少年は、アリスの姿を見てそんなことを言った。彼女の琴線にその一言が触れたが、「子供なんだから」となんとか怒りを抑える。

「はじめまして、アリスといいます。あなたは？」

アリスは最初が肝心と、冷静に銀髪の少年に自己紹介をしたが、額には青筋が浮かんでおり言葉には棘があった。彼女の雰囲気には少年2人はたじろぐ。

「……キルア」

「よろしくです」

アリスは、笑顔でキルアと握手をした。

「ところで、アリスはどんな料理を作ったの？ 審査はだめみたいだったけど」

「これです」

ゴンは興味深そうに、アリスの料理を眺めた。

「これです」

2人の前に自分の料理を見せる。2人は、驚きと戸惑いの表情を

浮かべていた。

アリスの皿に載っていたのは魚であった。ただし、頭としっぽが焼きおにぎりで再現されていたが。

『……………』

「課題と違うことはわかってましたよ……………」

その料理を見て言葉が出ないゴンとキルア。そんな2人の態度にアリスは、唇を尖らせて、明後日の方向を向いて拗ねる。

「…………この料理を処分してきますので、がんばってください」

気まずい雰囲気から逃れるため、アリスはそそくさと、外に出るために退散した。

「うつ……。あの無反応は恥ずかしいです」

2人の反応に、羞恥心から顔が赤くなるアリス。彼女は顔を赤くさせながら、遅めの昼食を広場の隅で取り始めた。

第4話 合格！？×不合格！？×料理！？（後書き）

以上で第4話をお送りします。

次は、再試験＋飛行船のお話を書く予定です。

第5話 救世主×再試験×ゆで卵

「おれが目指しているのは、コックでもグルメでもねえ！ ハンターだ！！ それも賞金首ハンターだ！！ 美食ハンターごときにきめられたくねえ！！」

アリスが昼食と食料調達から帰ってきた時、言い争いが行われていた。試験官に喧嘩を売っているのは少し小太りの男性で、彼の近くには破壊された調理場があった。

「どういう状況なのでしょう……」

アリスは試験会場の入り口近くで、その揉め事を見ていた。彼女は、手に新しい魚を持って立ちつくしている。

「みなさん料理の方は……？」

アリスは近くにいた受験生に、なぜこのような事が起こったのかを訊ねようとした。しかし、喧嘩を売っていた受験生が前半の試験を担当した試験官の張り手で吹き飛ばされる光景を見たため、訊ねる事が出来なかった。

「ちょっと、ブハラ！ 余計な手出しはしないでくれる？」

「そんなことを言ってもよ、メンチ。おれは腕の2・3本で済ませられるけど、メンチはこいつを料理しちゃうだろう？」

試験官に突っかってきた受験生を気絶させた大柄な試験官——
ブハラ——の行動に、会場内の受験生は、緊張した雰囲気となった。

「まだ文句のあるやつはいる？ ないなら、とつとと帰りなさい」

メンチは、受験生達に帰るよう促す。受験生たちは、齒ぎしりを
して悔しそうに彼女を見ていた。

「あの……」

その中で、無謀にも声をかける人物がいた。いまだ状況が把握で
きていないアリスである。

「なんで、みなさん喧嘩腰になつたいるのですか？」

『……………』

彼女の一言に会場の雰囲気は和らぎ、「こいつなに言つてんだ？」
という空気が流れる。それを感じ取ったアリスは、まずい事でも言
ったのかと思い、周りを見渡す。

「……ああ。食材を取りにいつていたのね？」

質問を受けたメンチは、アリスが持っている釣り上げた魚を一瞥
し、納得した。

「2次試験後半の合格者は“0”。今年のハンター試験は終了よ。お譲ちゃん」

試験官メンチの発言に対してどういう反応をするか、他の受験生が見守る。が、アリスは「そうですか……」と若干落ち込んだ声で踵を返した。

「お、おい！ どこに行くんだ！？」

アリスの反応に、受験生の1人が彼女に声を掛ける。

「どこに行くって……帰るのですが、何か？」

「帰るって……。あんたはこの判定に不満がないのか！？」

アリスは、さも当然のように帰る事を告げる。その言葉に、彼女に質問した受験生は少しうろたえながら、食い下がる。

「試験官の判断は絶対って聞いているので。その判断に従うだけですか？」

「潔いわね。ほら、貴方達もさっさと帰りなさい」

メンチはアリスの言葉に感心し、留まっている受験生達を追い払うように帰る事を促す。

受験生達は渋面を浮かべて、試験会場を去ろうと建物を出る。

『しかしメンチ君。合格者“0”は、ちと厳しすぎやしないかの？』

大地が唸るような音とともに、拡声器を使用した声が試験会場に響いた。その場にいた全員が、会場である建物から掃きだされるように外に出て、音と声の元を探る。

「おい、あれ!!」

受験生の1人が、こちらにやってくる飛行船を発見した。その飛行船にはハンター協会のマークが施されており、審査委員会が収拾のために出てきた事を意味していた。

審査委員会が登場した事に安堵する受験生達。一部の受験生は、得意顔で試験官のメンチを見る。肝心のメンチは、一部の受験生の視線を気にする様子もなく、飛行船を見上げていた。

飛行船から、何者かが飛び降りてきた。飛び降りた人物は、下駄を履いた老人であった。彼は、綺麗に地面に着地した。その事に受験生達は驚きに包まれた。

しかし、アリスは別の意味で驚いていた。老人が纏う淀みないオーラ。鍛練を積んだ肉体。強者の姿であった。

「御無沙汰しています。ネテロ会長」

「ネテロ会長。ハンター協会

試験官のメンチは、緊張した面持ちで老人に挨拶を交わす。先ほどと違うメンチの態度に、困惑が受験生達に広がる。

ネテロ会長とメンチは、試験について話し合い、メンチは、試験官として問題があったと認め、再試験が行われる事となった。

「で、課題は何かの？ 試験官」

「そうですね……。課題は——“ゆで卵”」

先ほどとは難易度が違う課題に、安堵の感情が広がる。アリスも
“ニギリズシ”とは違い、知っている料理に笑みが浮かんだ。

「会長。私達をあの山まで連れて行って頂けませんか？」

「うむ。お安いご用じゃ」

ネテロ会長は、メンチが指差した山を見て意図を理解し、彼女の
依頼を快諾した。

「着いたわよ」

受験生達が連れてこられた山は、間が崖となっており、底が見え
ない。

「課題のゆで卵の卵を取って来てもらうわ。下は深い川になってい
るから安心していいわ。それでは、お先」

メンチは崖の際に立つと、飛び降りた。受験生達に動揺が広がる。

「取ってくる卵は、このマフタツ山に棲息するクモワシの卵じゃ」

試験の実演をしているメンチに代わって、ネテロ会長が説明する。
彼によると、クモワシは陸の生物から卵を守るため、マフタツ山の
間に丈夫な糸を張り、そこに卵を吊るすようである。

「これでゆで卵を作るのよ」

メンチの手には、クモワシの卵が握られていた。感心する受験生。

「気をつけてね。下の川の流れは急だから、数十キロの海までノンストップだから」

メンチの一言に、多数の受験生が足踏みする。そんな中、物怖じせずに飛び込む受験生がいる。ゴンやキルア、クラピカなどである。その中にもちろん、アリスの姿があった。

アリスは、伸びている糸に着地する。そして、ぶら下がっている卵を1つ回収すると。そのまま壁面に移動する。壁をすいすいとよじ登り、試験官の所に戻った。

「2次試験後半メンチの料理、終了。合格者42名」

こうして、無事に2次試験をアリスは通過した。

第5話 救世主×再試験×ゆで卵（後書き）

以上で、第5話をお送りします。

思ったよりも、内容が短くなりすみません

第6話 遊び×ゲーム×ネテロ会長

「改めまして、受験生の皆様お疲れ様です。ここにいる42名が2次試験合格者となります。次の目的地には明朝8時の予定となりますので、次に集合を掛けるまで自由時間とします。それでは、解散」

試験官の注意事項が終わり、受験生はそれぞれ別の場所に散らばる。

アリスも他の受験生と同じく、説明を受けていた部屋の隅に移動し、壁に背中を預けるように座り込む。

「ふう……。明日のために少しでも英気を――」

「ねえ。アリスも飛行船の探険いく？」

あまり疲れていなかったが、何があるかわからないために少しでも疲れを癒すために睡眠を取ろうとした。彼女の下にゴンとキルアの2人の少年が、飛行船の探険に誘いにやってきた。

アリスは興味がなかったのと、少し睡眠を取るために2人の誘いを断った。その時のゴンの落ち込み具合は、子犬が落ち込む様子と似ており、その姿に彼女は可愛いと内心思ったが、表情にはださなかった。

「あの表情は卑怯です。構ってあげたくなくなるじゃないですか……」

アリスは着ていた黒いぶかぶかのコートで口元を隠す。彼女の顔は、ゴンに思わずドキリとした恥ずかしさからか、僅かに朱色に染まっていた。

「……飲み物を飲んで落ち着きましょう」

アリスはゴンの落ち込んだ顔を見てから、そわそわする自分を落ち着かせるために食堂でジュースか何かを飲んで落ち着かせようと部屋を出た。もし、落ち着かなかつたらどうしようと不安をいだきながら。

アリスは食堂を探していると、窓際で話しているゴンとキルアの姿を見つけて2人に話しかけた。彼女はゴンに話しかける時、別れる前に感じた感情が出るか心配だったが、自身の体は何の反応も怒らなかったので、あの感情は何だったのか首を傾げたのだった。

「あつ、アリス！」

「お前、寝てたんじゃないのか？」

gonは嬉しそうにアリスを見て、キルアは頬杖をつきながら振り返った。

「寝付けないので散歩です」

アリスは人懐っこい笑みを浮かべて2人に近づく。ゴンは彼女が座れるように座っていたベンチのスペースを空けた。その行為にアリスは、ゴンにお礼を言った。座っている席順は、右端から、キルア・ゴン・アリスである。

「ねえ、アリス。キルアの家ってすごいんだよ！？」 山丸々が家で、使用人が200人もいるんだって」

「へえ、キルア君の家は、お金持ちなんですね」

ゴンはアリスに興奮した様子で、キルアのお家事情を彼女に話す。話題にされているキルアを横目で見ながら、アリスは相槌を打ち、話を聞いていた。

「オレの話しもだけど、アリスの話しが気になるな。あんだ、オレと同類だろ？」

キルアは、アリスを見ながら不敵な笑みを浮かべた。彼女は、キルアの視線を素知らぬ顔で受け流す。

「キルアと同類？ ヒソカもだったよね？」

「ああ。ヒソカと同じ匂いがこいつからする」

キルアは、アリスを指差しながら失礼なことをゴンに言う。ゴンは、彼女をじっと見つめ、キルアが言った“匂い”の意味を探ろうとした。

「戦闘狂と一緒にしないでください」

「そつだよ、キルア。アリスからは、キルアと同じ感じしかないよ」

アリスは、ヒソカと同類にされるのは心外だとばかりに、頬を膨らませてキルアに抗議する。そんな彼女と同調するようにゴンは、彼女をかばう。かばう理由は曖昧であるが……。

「オレみたいに隠すのがうまいんだよ」

「アリス、そうなの？」

ゴンは、アリスを見つめて問いかけてきた。

アリスは、どういう風に答えようか悩む。キルアが“同じ匂いをする”というのは、おそらく血の匂いだと検討をつける。その匂いの原因は、保護者達によるものであったため、答えにくかった。しかし、黙っているのは悪い気がしたので、話せない部分は適当に答えることにした。

「えつとですね……、小さい頃から裏の仕事をしていたと生きていけなかったので……」

「ふーん。あんたも苦労してるんだな」

アリスが自分の生い立ちや保護者について軽く話す。キルアは当たり障りのない声を掛け、ゴンは少し申し訳なさそうな表情をしていた。彼女は、ゴンに気にしないように言つと「ごめん」と返事が返ってきた。

どう反応すればいいか困っていると、左から殺気を感じた。

「――!!」

アリスは、とっさに殺気を感じた場所を見るが、そこには誰もいない。

彼女は、警戒しながら視線をゴンとキルアに向けると彼らも殺気を感じたようで、アリスと同じ反応をしていた。

「どうしたのじゃ？ 向こうに誰かいたかの？」

3人の背後から老人の声が聞こえた。アリスは振り返る反動を利用した回し蹴りを放った。

「ふむ。なかなか良い蹴りじやの」

しかしアリスの蹴りは、老人の左腕に防がれる。着地した彼女は、バックステップで老人から距離を取った。

アリスの動きに合わせて、キルアとゴンも老人から少し距離を取った。

「3人とも、そんな警戒なさんな」

老人は、3人の反応がおもしろいのか、笑っていた。

「さっきのあれ、爺さんがやったの？」

キルアは警戒を怠らず、老人に問いかける。老人は肯定し、キルアは額に冷や汗を流しながら「年の割に素早いね」と感心した。

「なに。ちょっと歩いただけじゃ」

老人は飄々と、キルアの言葉を受け流す。

「それで……、なんの御用です？ ネテロ会長」

「なに。いま暇でな。どうじゃ、わしとゲームをせんか？ わしに勝ったら、ハンターライセンスをやるう」

キルアとネテロ会長の話しに割り込む形で、アリスは用件をきりだした。

ネテロ会長は暇なことを理由に、3人をゲームに付き合うよう提案した。さらに勝利すれば、3人にハンターライセンスが贈られるというとんでもないものであった。

『うわーいいかげん』

ネテロ会長の発言に、3人は呆れかえった。彼はそんなことを気にせず、ゲームが出来る広さのある部屋に移る事を彼らに伝えた。

「はあはあ……」

「はっはっは……」

ゴンとキルアは息を切らして、ネテロ会長が持つボールを睨んでいた。会長が提案したゲームは、『会長が持つボールを奪う事。どんな攻撃もOKで、会長からは攻撃しない』というものだった。

手始めにキルアから挑むが、軸足への攻撃や裏社会の技術を使うも、ことごとくいなされ敗北する。ゴンは、初めの絶好の機会を天井に頭をぶつけるという失態で逃し、キルアと同じ道を辿った。その後はアリスの予定であったが、悔しそうに会長を睨みつけていたキルアに譲り、その後はゴンに順番を譲った事で彼女はまた会長に挑戦していなかった。

「ほっほっほ。他愛ないの。面倒じゃから3人いっぺんに掛って来なさい」

「その前に、私が挑戦してもいいですか？ ゴン君とキルア君は休息してください」

「大丈夫！ まだ動けるよ」

「まだまだ余裕だし」

会長は埒が明かないと判断したのか、ゴン・キルア・アリスに纏めて掛かってくるように言う。しかし、アリスが2人を休憩させる目的で相手になると提案するが、ゴンとキルアは彼女の提案を却下し、まだ動けると主張した。

その様子には会長は満足げに笑い、手を止めている3人を注意深く観察していた。

「ほれ、1人でも2人でもいいから掛けていらっしやい」

「っ！ ゴン、アリスいくぞ」

会長の言葉に舌打ちをするキルアは、2人に行動するように声を掛けた。

「うん！」

「お手柔らかにお願いします」

gon は今までの疲労を感じさせない動きで、会長が持つボールを目標に駆け出し、アリスはキルアと gon がボールを奪いやすくするために会長をターゲットに駆け出す。

「うむ。いつそう油断できない相手になりそうじゃ」

肝心のネテロ会長は、先ほどと違い、飄々とした雰囲気から緊張感を持った雰囲気を感じ、3人を注意深く観察した。

まず、gon とキルアがボールを持つ左手に手を伸ばす。会長は、お見通しとばかりにボールを左右に移動させ、2人を翻弄する。2人はなんとか動きに喰い付き、ボールを追う。

「ほおっ!？」

隙が出来た会長の懐に気配を絶ったアリスが素早く近づき、会長がボールを持つ左腕を手刀で叩く。しかし、会長は体を捻る事により回避。そこに、2人が手を伸ばす。しかし、会長は体を捻った勢いを利用したサイドステップで離れる。

「ぬっ!？」

しかし、アリスの足払いにより思った距離を稼ぐ距離が出来ず、しかも態勢が崩れた事により、ボールが手元を離れる。

『いただき!!』

「あまい!!」

チャンスとばかりにゴンとキルアが、会長の手を離れるボールに飛びつく。だが、会長は手首のスナップでボールに勢いをつけて奪われるのを防ぐ。さらに倒れるのを左足で踏ん張り、踏み込む事で手元から離れたボールを回収する。

「なかなかやるの……」

会長は3人の連携を感じし、額の冷や汗を拭い去る。

「ゴン君、キルア君。今度は私が攻めますので、隙が出来たらボールの確保をお願いします。その間でいいので、少し休憩しておいてください」

「……はあはあ。……うん、わかった」

「……ああ」

アリスは、2人の動きが少し悪いを感じ、休憩とボールを取りやすいようにするため、1人で会長に挑んだ。まず右足を勢いよく踏み出し、会長の目の前に移動して、会長の左手に自分の右手を伸ばす。

「あまい!!」

会長は、柳の様な動きでアリスの攻撃を避ける。

アリスは、その動きを捉えようと足に凝を行い瞬発力を強化したり、動きを阻害する目的で間接を中心に足と同じく拳を凝で纏って

殴ったりした。だが、それらは同じように凝や堅で防がれ意味をなさなかった。それでもめげずに、フェイントや攪乱目的の動きを交えたりしてどうにか隙を作ろうとしたが通じない。

「お主、いい動きじゃの」

「ありがとうございます」

会長はまだ余裕があるのか、微笑みながらアリスに称賛をおくる。彼女もまだ動きに余裕があるのか微笑と返す。

「うむ。まだ大丈夫そうじゃな。この速度は付いてこれるかの？」

「くっ……」

会長は、アリスから放たれる拳や蹴り、ボールを掴む腕をいなす速度を少しずつ上げていった。

アリスは、初めは会長の動きを的確に捉えていたが、段々とそれが難しくなり始め、会長の動きに翻弄される。動きを少しでも阻害させるために会長の足が自分の足に引っ掛かるような足運びをするが、逆にアリスが動きを邪魔されたり、こちらの動きの勢いを利用して避けたりといった攻防が繰り広げられていた。

「ねえ……キルア。あの動きについていける？」

「無理。なんとか目で追えるけど、身体がついていかねえ」

「だよな……」

ゴンとキルアは、アリスとネテロ会長のボールの攻防を見ているだけしかできていなかった。言われた通りに隙が出来て、ボールを奪うチャンスがやって来ても奪える自信が2人にはなかった。2人の動きは次元が違っていた。

ゴンは2人の攻防を純粋に『すごい』という感情で見えていたが、キルアは複雑な思いで見えていた。

彼は暗殺一家のゾルディック家の跡取りとして、幼い頃より家族から英才教育を施されており、腕には自信があつた。しかし、自分と同じ年のしかも女の子の動きに付いていけない自分に苛立ちが募っていく。

しばらく激しい攻防が繰り広げられていたが、唐突にそれが止まった。ゴンとキルアは訝しげに、あれほど激しい動きをしたにもかかわらず、息が少ししか乱れていないアリスと全く息が乱れていない会長の様子をうかがった。

「やめます。私の降参です」

「はあ？」

「えっ？」

これからというときに、アリスは白旗を上げた。ゴンとキルアは、驚きのあまり大声をあげ、ネテロ会長は目を見開いていた。

「ばっ！！ これからって時に、なに言ってるんだ！」

「そつだよ！ 何でやめちゃうの！？」

「理由ですか？ 寝る時間になったからに決まっているではないですか」

『……………』

「ほっほっほ。まあ、寝る子は育つというしのう」

アリスがゲームを降りた理由に沈黙する2人。壁に掛っている時計を見れば、丁度12の位置に長針と短針が合わさっている。相手をしていた会長は、彼女の年相応の理由に愉快そうな笑い声を上げる。

「では、お先に失礼します。2人ともがんばってください」

アリスは3人の反応を気にすることなく、お辞儀をしてゲームをしていた部屋を退室した。

「お主達はどうするかね？」

会長の問いかけに、2人は会長に立ち向かうことで返答した。

第6話 遊び×ゲーム×ネテロ会長（後書き）

以上で、『第6話 遊び×ゲーム×ネテロ会長』をお送りします。
今回は、飛行船のお話で不自然がないようにしたのですが、どうでしょう？

次回は、いよいよ第3次試験です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7751v/>

HUNTER×HUNTER～とある少女の冒険記～

2011年10月9日10時14分発行